

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

ルカが伝えた「良い知らせ」

——ルカ伝福音書 訳述——

川上直哉

多くの人が、すでに整理して物語っております通り、あの出来事は、確かに私たちの
間で起こったのです。それを語ろうとするものの中には、褒められたものばかりでもあり
ませんでした。それで、テオフィロ（神を敬愛する人）閣下、ここに私が一筆啓上申し上
げました。つまり、最初から全てを目撃した人々・この出来事を伝える御言葉の奉仕者が、
私たちにきちんと伝えてくれた事柄があるのです。それで私は、そのことを、最初から・
全て・詳しく・順序よく知っておりますので、その通りお伝えしたほうがよろしかろうと
考え、閣下にこの手紙を認（したた）め、ご高覧に与（あずか）ろうと願ったことでした。
そのようにして、閣下が学んでくださいました事柄について、一層、確かに知っていただ
けますようにと、その様に願っております次第です。

イエス様は一人の子どもとして、どんどん成長しました。そして体は強くなり、頭は賢
くなって行きました。神様の恵みがその上にあったのです。

毎年イエス様の両親は首都エルサレムに行きました。「過ぎ越しの祭り」をお祝いする
ためでした。これはユダヤの大切なお祭りでした。ユダヤの民が、どのようにして生まれ
たのかをみんなで確認し・体験するお祭りです。ユダヤの人々は、遙か昔、大帝国エジプ
トの奴隷でした。そして聖書の神・主がその苦しみを憐れみ、モーセを遣わして奴隷の解
放を成し遂げてくださった。奴隷の解放に抵抗するエジプト帝国は、聖書の神・主と戦い

ます。その結末は、悲惨なものでした。罪もない子どもたちが、次々と死んでいくことになったのです。古今東西、正義のための戦いは、そのような悲劇を呼び出すものです。しかし、ユダヤの民のご先祖は、不思議な神様の恵みによって、守られました。エジプト全土をくまなく襲った死の闇は、ただユダヤの先祖の所だけを「過ぎ越した」のでした。それで、そのことをお祝いして記念し、忘れることのないように、今でも「過ぎ越しの祭り（ペサハ）」が、毎年春に、一週間、行われています。特に首都エルサレムでは、実に盛大に、このお祭りが行われていました。イエス様の両親も、このお祭りのために毎年、エルサレムに行ったのです。

イエス様が 12 歳になった時のことです。この年も、恒例通り、エルサレムの「過ぎ越し祭り」に三人は行きました。この年も、たくさんの人が世界中からエルサレムに集まりました。祭りの日々は終わり、ガリラヤ方面へと帰る多くの人の列に加わって、三人もナザレへ戻る、はずでした。子どものイエス様はその時、エルサレムに残っていたのです。ですが、両親はそのことに気づきませんでした。行列のどこかにいるのだろうと思っていました。一日、歩いて旅をして、夜になったのでみんなで野宿をするその時に、息子の姿が見当たらない。親類縁者に聞いてみますが、見つかりません。驚いた両親は、イエス様を探しながら、エルサレムまで戻ることになりました。そして「三日後」に、イエス様を神殿で見つけました。ユダヤの国の法律である「モーセの掟」の専門家の中に、イエス様はいました。大人の専門家の話に混ざり、議論をしていたのです。イエス様の言葉を聞いたすべての人は、その受け答えに、びっくりしていました。その様子を見たイエス様の両親は仰天し、子どものイエス様に向かって、その母親であるマリヤムはこう言ったのです。「あなた、どうしてこんなことをしたのですか。いいですか、あなたのお父さんとお母さんは、こんなに心配して、あなたを探したのですよ。」するとイエス様は母親にこう答えました。「なぜ、私を探していたのですか。私は、私の父の所にいるのです。それは当然のことではありませんか。」両親はこの言葉の意味が分かりませんでした。イエス様は両親と共にナザレへと下って行きました。イエス様は両親の言う事をよく聞く謙遜な子どもでした。

イエス様の母親は、こうした事柄を深く心の中にしまい、大切にしていました。

イエス様は、その知恵が深まり、年齢を重ね、神様の恵みを豊かに受けて行きました。神と人からの恩寵と厚意に包まれて、イエス様は成長したのでした。

皇帝ティベリウス陛下がローマ帝国全体の支配者となってから 15 年目のこと。つまり、ポンティオ・ピラト閣下が皇帝の代官として、イエス様の故郷があったユダヤに派遣されていた時のこと。

ピラト閣下の監視の下で、ユダヤは四分割され、四人の「テトラルケース（四分の一王）」によって統治されていた時のこと。つまり、イエス様の故郷ガリラヤがヘロデによって・イトゥライアスとトラコーニティドスがヘロデの弟のフィリップによって・アビラ地方がリュサニアスによって、それぞれ支配されていた時のこと。



神殿ではアンナスとカイアフアが大祭司であった時のこと。

神様の言葉がヨハネに下りました。このヨハネは、日本で言えば「宮家」に当たる神殿の高い身分の家の人で、ザカリアの息子でした。ヨハネは人の住めない「荒野（あらの）」と呼ばれる場所にいました。ヨハネはそこから、ヨルダン川の流域全体に出て行き、「罪の赦し」を与える「沈めの儀式」に与るように、人々に訴えました。それはまさに、旧約聖書のイザヤ書に以下の通りある通りでした。

荒野で叫ぶ 声がする。
聖書の神が お通りなさる。
お通りなさる 道を備えよ。

全ての窪地は
平らになって
全ての山も
すべての丘も
低くなる。
曲がったものは
まっすぐに
荒れ果て破れた道路もすべて
きれいに整備 しなおされる。

そうしてついに 人みな全て
神の救いを見るであろう。

ヨハネの訴えは、人々に届きました。有象無象の人々が、彼のところにやってきました。「沈めの儀式」を受けようとしたのです。しかしヨハネは言いました。

蛇という 悪魔の化身の 子どもたち。
誰が語って 教えたか。
神の怒りを うまく逃れる事ができると。

救いを得たくば 聞くがいい。
心を入れ替え 新しくなり
新しい実を 稔（みの）らせよ。

自分のことで 言おうとするな。
「我らの父祖は アブラハム」と。
あらかじめ
しっかり言って 聞かせよう。
石ころの 一つを取って 声をかけ
「アブラハムの子」を作り出すのも
神の御手。

今や見よ 斧はすでに 置かれている。
邪魔な樹木を 切り倒すために。
良い実を結ばぬ 木はすべて
切り倒されて 薪（まき）にされ
火にくべられて 燃やされる。

集まってきた有象無象の人々は、驚き怯えて訊（き）きました。「私たちは、どうすればいいのですか？」

ヨハネは答えて言いました。

下着を二枚 持つ者は
そのうち一つを 手放して
下着ひとつも持たない者に
気前よく あと腐れなく
あげてしまって忘れてしまえ。

食べ物を「明日の分だ」とかかえる者も
まったく同じ ようにしろ。

この世界が壊れ始めている、今のままだと自分たちは危険だと、多くの人が感じていました。それで、その当時、もっとも「成功」していた人ほど、恐怖を感じていたのです。たとえば「徴税人」という人々がいました。この人々は「ローマ帝国の税金」を徴収する

係でした。世界最強のローマ帝国軍を維持するために、帝国は各地の住人の中から「徴税人」を募集しました。応募して雇われた人々は、「帝国の徴税人」として、家々を回ります。人々を苦しめ押さえつける軍隊の経費を、人々から集めるのです。当然反発されますが、「帝国の軍隊」の暴力で、すべての反発を押しつぶす。帝国からの徴税ノルマはすべて、簡単に達成できます。ついでに、何割か増しで、おカネを集める。それが、「徴税人」の収入になりました。その収入は、莫大なものになりました。そうして「わが世の春」を謳歌していた「徴税人」は、しかし、この世界の終わりを予感して、恐怖していました。集めた財産に倍する憎しみを、自分たちは集めていると、知っていたからです。

罪を洗い流す「沈めの儀式」を受けようと、「徴税人」たちもやって来ました。そして「私たちはどうしたらよいのですか」と訊ねます。ヨハネはこう答えました。

あなたには あなたの務めがあるだろう。
あなたの務めの
命じるところを乗り越えて
大きな欲に 流されて
やたらとおカネを集めている。
それを止めれば それでいい。

「徴税人」の背後には、「ローマ帝国軍」が控えていました。世界最強の軍隊です。その暴力は、ユダヤの国の全てを覆っていました。その兵士たちも、不安になっていました。どんな犯罪行為も、自分たちは許される。すべての人が、どこまでもおとなしく従っている。その様子とは裏腹に、激しい怒りが燃えている。その怒りはマグマのように、いつか噴き出す時を待つ。その様子は、現場の軍人に、はっきりと感じ取られていたのです。

罪を洗い流す「沈めの儀式」を受けようと、「ローマ帝国軍の兵士」たちもやって来ました。そして「私たちはどうしたらよいのですか」と訊ねます。

ヨハネはこう答えました。

強請（ゆす）りたかりの類をやめろ
無花果（いちじく）の実を
見せつける愚かな真似は
金輪際もう やってはいけない。
勤めの対価は 定まっている。

その報酬で 満足すること。
足るを知り まっとうに暮らせ。

この時代、たくさんの種を孕む無花果（いちじく）の実は「豊穰」のシンボルでした。
「こんなに武器があるのだぞ」と脅して保つ「抑止力」のウソを、ヨハネは「無花果の実
を見せつける」と言ったのでした。

このようなヨハネの言葉に、有象無象の人々はみな、驚き感動しました。そして心の中
で語り合ったのです。「この人こそ、キリストと呼ばれる救世主ではないか。」

そうした人々の思いを知り、ヨハネは答えて言いました。

確かに私は この川で
すべての罪を 水に流して
救いを告げる。
しかし 私のすぐ後に
はるかにすごい 人が来るのだ。

私はその人の 奴隷になって
サンダルを紐を解き 足を洗う
そんなことすら 恐れ多くて
できたものではないのです。

その人も
あなたに「沈めの儀式」をなさいます。
ただしそれは、
神様の息と炎でなさるのです。

その手には箕（み）がある。
小麦の散らばる 脱穀場で
彼は小麦を掃き集め
箕に載せ選り分け 選別し
倉に納めて蓄える。
残った殻は 集められ
消えない炎で 焼き尽くされる。

ヨハネは実に多くのことを語り、人々に良い知らせを伝えたのでした。

「テトラルケース（四分の一王）」であるヘロデは、このヨハネに悩まされていました。その妻ヘロディアとの道義的な問題があったのです。すべての人が口をつぐんで「見ないこと」にしていた問題を、ヨハネは指弾し責め立てました。多くの人が、その厳しい声を聞いていたのです。この妻ヘロディアは、ヘロデの弟の妻でした。ヘロデはこの結婚のことで悪事を働いていたのですが、さらにそれに加えて、悪事を働きました。つまり、ヘロデはヨハネを牢屋に閉じ込めたのです。

このヨハネのところに、まだ誰でも来ることができた頃のことです。イエス様が「沈めの儀式」を受けにやってきました。その儀式が行われたとき、祈っていると、天が開け、神様の特別な息吹が、イエス様のところへ吹き降りてきました。それはまるで、鳩が高い所から降りてくるような感じだったのです。そして、天から声が聞こえました。

あなたこそ、私の大切な倅（せがれ）だ。

あなたがいて、私は本当に、嬉しかった。

まさにこの時が、イエス様の活動の始まりでした。その時、イエス様は、だいたい 30 歳頃でした。その頃、神様の息に包まれてマリアから生まれたイエス様は「ヨセフの息子」として世の中に知られていました。